

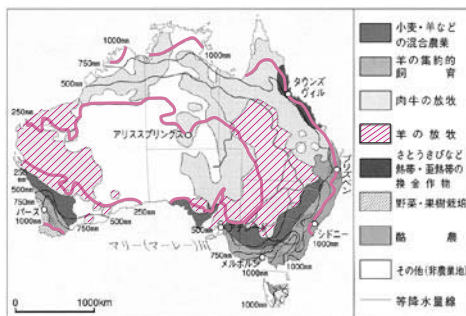
# オーストラリアの学習指導案

福岡雙葉中学高等学校 小園 修

## 1. はじめに

筆者の勤務校は中高一貫校であるため、中学校と高校をかけもちで教える機会が多い。以前、はじめて中学1年生の地理的分野を担当した際、地理を楽しくわかりやすく教えるために試行錯誤を繰り返しながら、最終的には現地で購入した農産物や取り寄せた鉱産資源、また現地で撮影したスライド写真や民族音楽を駆使しての授業方法に辿りついた経験がある。地理のおもしろさや楽しさを教えるためには、教科書、地図帳、パネル写真、現地の実物、民族音楽、ビデオ教材などを有効に使って、立体的な授業展開を心がけたい。『楽しく学ぶ世界地理B(最新版)』(以下、教科書)では、地理が楽しく学習できるように、現地のようにリアルタイムで伝えるために、世界各地からの旅行記や体験談などが書かれた「現地レポート」や身近な生活習慣の違いから異文化理解を学べるよう工夫された「ところかわれば」が設けられており、さらにガイドブックかと思わせるくらい豊富な「現地の写真」が掲載されている。そこで、本稿では「現地レポート」、「ところかわれば」、「現地の写真」を使ったオーストラリアの指導事例を提案したい。

## 2. オーストラリアの農牧業



▲⑤ オーストラリアの農業地域(1997年)  
帝国書院『楽しく学ぶ世界地理B(最新版)』p.97

農牧業は気候との関連が深いことは言うまでもない。p.97「⑤オーストラリアの農業地域」には、降水量等が挿入されているので、これを活用してオーストラリアの気候の特徴を概観させたい。

北部は雨季と乾季の区別が明瞭で一年中高温なサバナ気候に属し、年降水量は1000mmを超える地域である。一方、内陸部や西部は年降水量250mm未満で、きわめて降水量が少ないことがわかる。年降水量が300mm前後のアリススプリングス近郊を撮影したp.96「①奥地での牛の放牧」の写真を見ると、草はほとんど見られず、赤茶けた地面が一面に広がっている。このような地域では、放牧できる家畜の数は多くは望めないのが現状である。ここで、BSE問題でアメリカ産の牛肉の輸入が禁止されて以来、オーストラリアからの牛肉の輸入量が急増し、スーパーマーケットで見かける輸入牛肉の大部分がオーストラリア産の「オージービーフ」であることに気づかせたい。

これに対して、年降水量が500mm前後あるアデレード付近を撮影したp.96「②牧草地で行われる



①奥地での牛の放牧

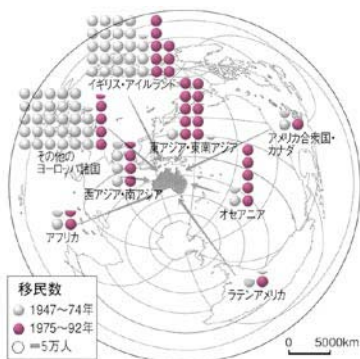


②牧草地で行われる牧畜

牧畜」の写真を見ると、ニュージーランドの牧草地を思わせるほど緑豊かである。現地レポート「草が少ないと家畜も少ない」によれば、この地域は肥料を与えて牧草を育てることができるので、数多くの羊を飼育することができる」と記されている。ここで、羊には羊毛用と肉食用があり、オーストラリアの羊は乾燥に強く、毛質のよいメリノ種がほとんどであることを学習させたい。また、最近ブームになっているラム肉はコレステロールが低く、アミノ酸が豊富で、脂肪を燃焼させる物質が多く含まれているため、ダイエット効果があることについてふれ、生徒の関心を引きつけたい。

### 3. さまざまなオーストラリア人

19世紀末までオーストラリアはイギリスの植民地であったため、イギリス系の住民が大部分であった。しかし、p.99「⑥オーストラリアへの移民数」を見ると、第二次世界大戦後ヨーロッパから移民を積極的に受け入れるようになり、1975年以降、国家が他文化主義政策を推進した結果、アジアからの移民が増加していることがわかる。



▲⑥ オーストラリアへの移民数  
(オーストラリア政府資料)

帝国書院『楽しく学ぶ世界地理B (最新版)』p.99

筆者はこれまでに3回訪豪しているが、p.98「⑤チャイナタウン」の写真のように、シドニー、メルボルンのような大都市には、チャイナタウンが見うけられる。チャイナタウンでは、中国のみならず韓国、日本、ベトナム、インドネシア、タイなどから輸入した衣類や食料品が所狭しと並べられ多くの人々で賑わっている。多文化社会のようすがp.99の「ところかわれば」に記載されてい

る。筆者が1997年にシドニーを訪問し、チャイナタウンで買い物をしていた際、現地のチャイニーズに勘違いされ、欧米人にオペラハウスへの行き



⑤チャイナタウン

方をたずねられたことがある。拙い英語と身振り手振りで必死に説明し、何とかかわってもらえた。この時、多文化主義国家オーストラリアを実感した。

### 4. おわりに

教科書には、現地のようすをリアルタイムで伝えるために、世界各地からの旅行記や体験談などが書かれた「現地レポート」、身近な生活習慣の違いから異文化理解を学べるよう「ところかわれば」が設けられ、さらに豊富な「現地の写真」が掲載されている。日ごろの生活の中から日本と海外の国々との関わりについて学ばせることが、「地理」の主眼である。

そのためには、できるかぎり生徒自身に諸外国との関係について調べさせ発表させたい。たとえば、日本とオーストラリアとの貿易について、生徒にスーパーマーケットやデパートの食品売り場で「オージービーフ」がどのように取り扱われているか、値段は国産牛とどのように違うかを調べさせたい。さらに、BSE問題でアメリカ産牛肉が入荷しなくなって以来、オーストラリア産の牛肉の入手を余儀なくされた牛丼店や牛タン専門店を直接訪問したり電話で問い合わせたりして、その現状を取材させ、2学期の授業でプレゼンテーション形式で発表させたい。興味・関心があることを生徒自身で調べることによって、一方通行になりがちな授業に活気がでてくるようになり、生活と密接な関係がある「地理」のおもしろさ、楽しさを感じることができるであろう。